

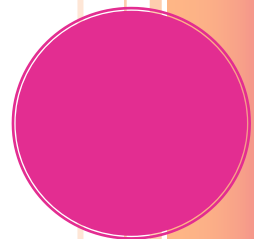
「1 人を支える学級」づくり

『困った子』ではなく、『困っている子』A 児と学級集団の成長をつなぐ

3 年生の時、学校で自分や周りの人を傷付け、居場所をなくし苦しんでいた A 児。4 年生になった彼が友達に支えられ、また支えながら、本来の自分の姿を取り戻していった姿から、教育の在り方を考えた。
A 児の成長はそのまま学級集団の成長へとつながっていった。

大分市立大在西小学校 石井真澄

2017/01/10



「1人を支える学級」づくり

『困った子』ではなく、『困っている子』A児と学級集団の成長をつなぐ

I はじめに

「困った子」。私が初めて教壇に立ってから3年目のことである。気に入らないことがあったら突然暴れ出し、教室を出ていく。「やりたくないから」と算数のプリントを手にした途端に破り出す。そんな子ども達に出会った。私にとっては衝撃であった。学級には少なくとも5人はそんな子がいた。

今考えると、それは発達障害等で苦しんでいた子ども達の姿であった。大学で学んだ少しの知識はあったものの、当時の私は彼らの行動がなかなか理解できず、ただ追いかけて、説得し、教室に連れ戻すということを繰り返していた。私は彼らを「困った子」だと思っていた。「ちゃんと席について、教師の話をもっと聞ける子」を求めているのだ。しかし、今になって思う。彼らは「困った子」ではなく、「困っている子」だったのだ。

II 研究の概要

1 A児との出会い

(1)3年生のA児

隣の教室でいつも、「Aさん！」という担任の先生の声が響く。A児は3年生、私は1年生の担任をしていた時だ。それがA児との出会いであった。3年生のA児は、いつも吊り上がった目をして、他人を睨みつけていた。それは、A児のさみしさ、困りから来るものであろうとは思っていたが、それをどうかしてあげることができないまま、胸を痛めていた。廊下で暴れているA児を抱きしめようとして思い切り足を蹴られたことも何度かあった。

担任していた1年生の子ども達が廊下で叫んでいた。見ると、廊下で縄跳びをしているA児がいた。そのA児に向かって、1年生の子ども達が一生懸命に「Aさん、廊下で縄跳びをしたらダメだよ」「廊下が傷つくからやめて！」と訴えていた。私はその様子を後ろから見守ることにした。A児は縄跳びを振り回しはするものの、その縄で1年生を傷つける様なことはしなかった。その姿に、A児の本来の優しさが隠れていることを確信した。A児は、本当は分かっている。自分でもそんなことはしたくないのだと。



またある日は、A児が1人教室に残って本を読んでいる姿に遭遇した。思い切って話しかけてみた。するとA児は、読んでいた「三国志」の登場人物のことを詳しく話してくれた。その時に、A児が本当は、他人とのかかわりを求めていること。A児は好きなことに関しては、ものすごく興味を示し、その知識も豊富であることがわかった。A児の本来の姿はここにあるのではないかと感じた瞬間であった。

実際にA児は、3年生の段階で、様々な専門機関や病院等に通っていた。「反抗挑戦性障害」という2次障害も出ていた。A児がどれほど、小さい胸を痛め、苦しんでいたのだろうかと思う。当然、A児にかかわる全ての子ども達、先生方、そして保護者の方も大変苦しんでいたことは言うまでもない。

(2) 始業式の出会

4年生最初の日のA児は、教室の自分の席に座りはしたものの、落ち着きがなく、膝を立てたまま斜めに椅子に座り、その椅子を揺らしながら、私を威嚇していた。「Aさん、よろしくね」と言いながら、斜めに向いた彼の椅子を戻した。

そんなA児との出会いに当たって、心に留めておこうと強く思っていたことは、彼の本当の姿を信じてかかわろうということであった。3年生の彼を隣の教室で見ている、彼にかかわることは、かなりの時間と労力がかかるであろうことは覚悟していた。しかしそれと同時に、彼の中にある、光の部分を引き出していきたいという願いが私の中に強くあった。

2 研究主題

前述のようなA児の姿から、A児を含めた41人の子ども達と1年間を共に過ごすにあたり、A児を核にした学級づくりをしていこうと思っていた。そんな思いを込めて、以下のような気持ち(研究主題)で、2学期終了までの143日間を過ごした。

「1人を支える学級」づくり

～『困った子』ではなく、『困っている子』A児と学級集団の成長をつなぐ～

3 主題設定の理由

学級は、多くの子ども達がいって成り立っている。その一人一人にしっかりと寄り添い、その可能性を引き出していくご縁となっていくことが担任の役目だと思っている。

3年生の頃のA児を見ていると、A児は自分に対して自信を無くしているように思えた。A児に自信をつけ、そして友達とつながる喜びを感じさせたいと思った。そのためにはまず、A児が頑張っているところ、A児の良さを学級全体に広め、子ども達同士が認め合い、支え合う関係づくりをしなければならないと思った。そして、A児が変わる姿をA児にも、そして学級の子ども達にも実感させていくことが大切であると感じた。そのことが1年間の学級づくりにつながっていくと直感した。A児を支える学級こそ、残りの40人を支えることになるとの思いで、4年2組の1年間をスタートした。

4 研究仮説

A 児と周りの人々とのかかわりを大きく3段階でとらえ、以下のような仮説を立てた。

【研究仮説】 下記3段階のかかわりを経ていくことで、A 児は自分に対する自信を取り戻し、変わっていくことができる。学級の子ども達も A 児の頑張りや良さに気づき、A 児を支えていこうとするはずである。そして、A 児の成長が学級集団の成長につながるはずである。

1段階: 担任との信頼関係を築く

2段階: 学級の子ども達(学年の先生方)とのかかわりの場を多く仕組み、支え合う関係を築く

3段階: 学年の子ども達, 異学年の先生方, 管理職等の先生方とのかかわりの場をつくる

5 研究方法

(1) 研究方法

① A 児の本来の力・可能性を信じて、愛をもってかかわる **信じる**

② A 児の頑張っている姿、人のために役に立とうとしている姿をすかさず褒める **褒める**

③ 子ども達が A 児の頑張りや良さを認めている瞬間をとらえ、A 児や全体に伝え、広げる **つなぐ**

上記の3点を常に意識して、A 児や学級の子ども達とかかわり、日々の教育活動を行った。

(2) 研究方法について

① A 児の本来の力・可能性を信じて、愛をもってかかわる **信じる**

一番大事にしてきたことは、A 児を信じてかかわり続けることであった。A 児が何かトラブルを起こしても、そこには必ず理由があると思えた。実際にそうであった。しかし A 児は自分の思いや気持ちをうまく言葉に表すことができない。だからこそ苦しんでいたのだと思い、A 児なりの思いや理由を理解しようと努めた。

② A 児の頑張っている姿、人のために役に立とうとしている姿をすかさず褒める **褒める**

A 児が4年生になって最初に人のために役に立つ喜びを感じたのは、始業式の日であった。まだ担任に対して警戒心を抱いていた A 児に、たくさんの教科書やノート類等の配布の際に出るプラゴミの片づけを担当させてみた。次から次に出るゴミにあたふたしながらも、A 児はせつせと自分に与えられた仕事をした。そこで、A 児の頑張る姿を褒め、人のために働くことの喜びを感じさせようとした。友達からも「ありがとう！」と言われ、感謝されたことが、A 児にとっては何よりうれしかったようだ。

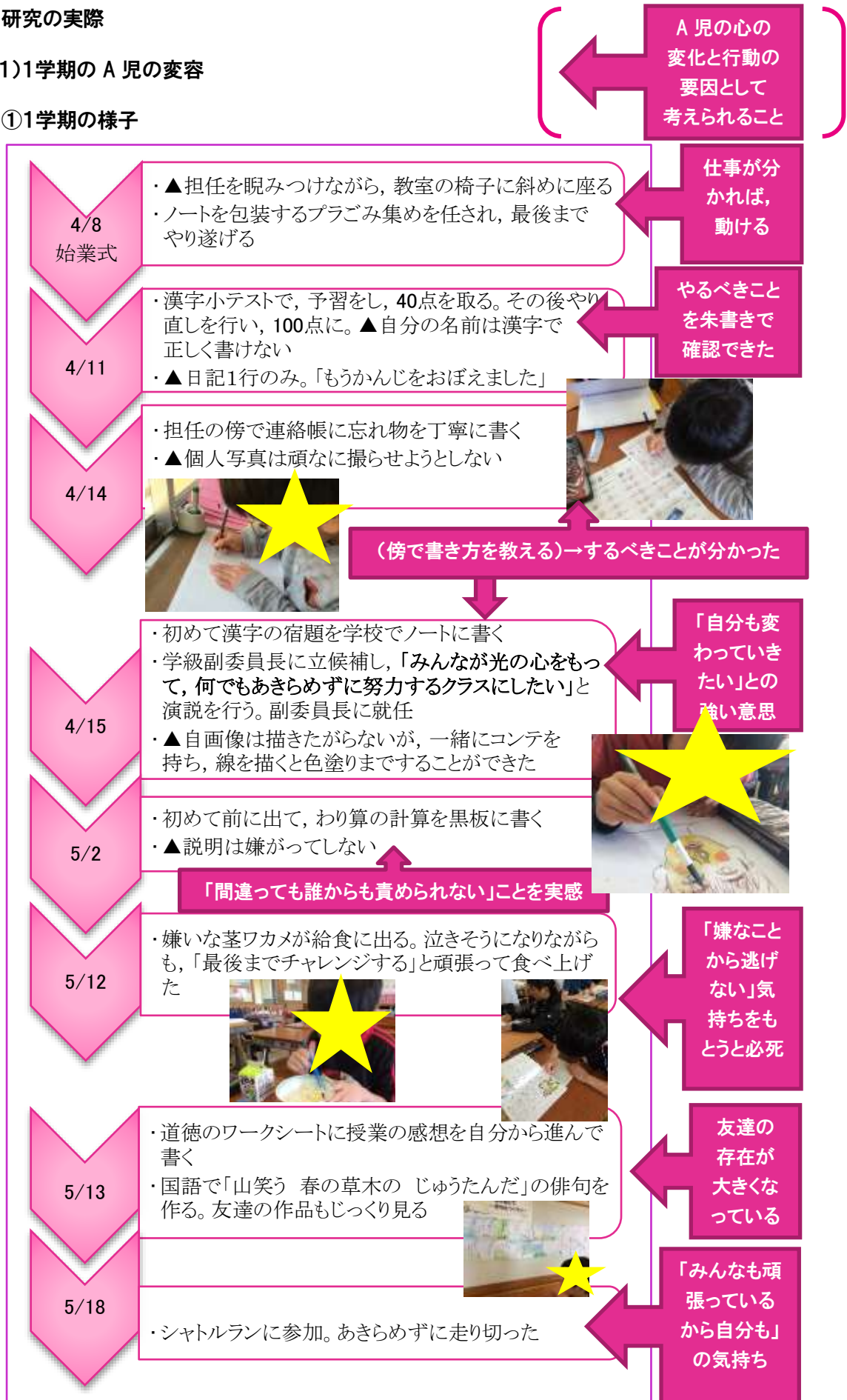
③ 子ども達が A 児の頑張りや良さを認めている瞬間をとらえ、A 児や全体に伝え、**広げる**
つなぐ

A 児の成長と共に、学級づくりの核として位置付けていたのが、毎日の日記であった。子ども達には毎日、自分が考えたこと・思ったことを日記に綴るということをさせた。その日記の中に A 児が登場してきたら、すぐに A 児を呼んで、傍で読んで聞かせた。A 児の頑張りや良さを認め、伝え、全体にも広げることを続けた。

6 研究の実際

(1)1学期のA児の変容

①1学期の様子



5/26

- ・国語の説明文をしっかりと読み込む
- ・今まで吹けなかったリコーダーを給食準備中に友達に教えてもらう。友達の前で披露 **※日記1**

友達が親身になって教えてくれる喜び

※日記1:きょうリコーダーれんしゅうをしました。ひるやすみやきゅうしよくのじゅんぴのときにみんながおしてくれました。みんなのおかげでぼくはうまくなれてうれしいです。こんどは、もっとむずかしいところをはやくふけるようになりたいです。音がくで「トロに会えるかな」をみんなでえんそうします。いまはほんばんにむけてれんしゅうをしています。うまくなったらつぎというれんしゅうほうほうでがんばってれんしゅうしています。あと「リバース」というきよもがんばりたいです。「リバース」でぼくは、いいうただなあとおもいます。

いい歌だよ。全校にAさんの「光の心」を届けようね。自分の思いをこんなに長くしかもしっかりかけてすばらしい!!がんばっているね。Aさん!!



友達の存在・できなかったことができるようになった喜び・更なる成長を目指す意志

5/31

- ・音楽集会前にも体育館前で練習。音楽集会では全校の前で、歌とリコーダーを披露
- ・日記に「みんなが教えてくれてできるように」「みんなのおかげで」と書く

「できる」という自信・友達の存在っていいな

5/31

- ・児相に行くため早退。日記に「大好きな算数や国語ができなくて残念でした。でも、音楽集会に出られてよかったと思いました」

みんなと勉強することの喜び実感・「テストで100点を取りたい」強い願い

6/1

- ・算数の単元テストで100点をとる **※日記2**

※日記2:「算数テスト」きょう3時間目に算数テストをしました。算数テストは100点とれるかしんぱいであまりじしんがもてませんでした。でも、さんすうですとをやってみるともっとふあんになりました。できるかな、ほんとうにできるかなと心のなかで思いました。でもだんだんかんたんになってきて、すぐテストがおわりました。みなおしをしているあいだは本がよみたかったです。でも、そのきもちおおさえながらみなおしをしました。2回めは百点をとるというきもちですとおしました。本がよみたかったけどがまんしてやってけっかは百点でした。まちがいもなくよかったとおもいました。テストがわたされたのは、かえるまえでした。ほんとうによかったとおもいました。

Aさんが3回も見直しをしてがんばったからだよ。こんなドキドキする気持ちでテストをしていたんだなあと思って、先生もうれしいし、Aさんの気持ちが本当によく伝わりました。心のへんかがよく読みとれる日記はすごいよ。これからもがんばって書いてね。

「テストで100点を取りたい」との強い願い。その願いがあるからこそ、本という誘惑にも負けず我慢をし続けた

6/7

・日記に自分の気持ちが整わない理由をしっかりと綴ることができる **※日記3**

※日記3:きょう学校で算数のときあまりのう(脳)がはたらきませんでした。ちよっとざんねんで、はっぴょうしたかったです。ちよっとかんじをかきすぎてゆびがいたくなってこれでいいのかなあとかん字がほんとうにあっているかをテストのやりなおしでたしかめました。それでさんすうであまりかんがえられないりゆだと思いました。

そうか。自分でどうしてかとしっかり原因を考えられているところ、すごいですね。次はそれをどうこくふくしていくかだね。大じょうぶ。Aならできる!!

「間違っても責められない」という安心感と自信

「自分は本当は、頑張りたいたいの、気持ちがついてこない」ことをしっかりと自覚できている。その上、理由もはっきりわかっている

6/8

・黒板の前で、算数の考えを説明することに抵抗がなくなる

6/14

・電池自動車で遊ぶ際、カメラを向けてもとびきりの笑顔返す



友達と担任を信頼

6/21

・道徳の研究授業。たくさんの先生方がいる中、自ら進んで発表する
・▲昨年度の3年部と管理職の先生方は睨みつける



自分を表現することの喜びを実感

昨年の自分を知っている先生やスーツ姿の先生を見ると、昨年度の辛い思いがよみがえってくるのでは

6/28

・朝、教室が汚れていることに気付き、自ら率先して友達と掃除を始める

人のために働く喜びを知り、行動に移した

- ・班の友達と授業内容について意見交換できる
- ・プールで顔をつける。手を貸そうとすると「自分でやってみる」と1人で黙々と頑張る
- ・隣の学級の子がすねて教室に入らなかった時、彼女に話をして落ち着かせ、その担任の先生に「こういう時は、しばらくそっとしておいた方がいいよ」とアドバイスをする

自分の経験からその子の気持ちが理解できる。「どうにかしてあげたい」との思い

- ・1年生B児が廊下を走り回り、渡り廊下で身を乗り出していた時、心配してB児を追いかける。その後、「Aさん、Bさんは『困った子』じゃなくて、『困っている子』なんでなあ」と言うと、「うん」と大きくうなづく
- ・B児が雨の中、遊具で遊んでいるのを発見し、ものすごく心配する
- ・毎日、自分の当番ではない上部の窓の開閉を進んで行く。
- ・▲保健係として、健康観察を届けるが、それを投げて渡していた。一緒に保健室に行き、やり方を教えると、別の所において養護教諭を試す行動をとる
- ・▲管理職の先生や指導主事に対して、「帰れ！シッシ」「聞いてないぞ！」と過敏に反応する
- ・▲書写・音楽(専科)の先生方に対して反抗的な態度をとる
- ・▲下校時に一緒に靴箱まで行くようにしていたが、担任しか見ていない。担任に対して、別れ際に照れながらも可愛い素振り手で手を振る

人のために働く喜び

担任との1対1のかかわりが強すぎる。そのため視野が狭くなってしまう

昨年の自分とB児を重ねていたのでは。B児が本当は困っていることを痛いほど共感できるから気になって仕方がない

昨年のことを知っている先生の前では、変わった自分を見せるのはまだ恥ずかしい

②1学期の考察

1学期のA児の成長ぶりは、目覚ましいものであった。3年生の頃のA児を知る子ども達や先生方は、口々に「Aさんは3年生の頃とは全然違う！別人みたい！」と言って下さった。

そのA児にとって有効であったことは、やはり、**自信をもたせること。「手応え感覚」を感じさせることであった。**8月9日に行われた大分市の研修で文部科学省田村視学官が講演をして下さった。その中で、「**学びに向かう力がどうして生まれるか**という、**子どものみならず大人でも同じ。この手応えというものが大事。何か頑張った時にうまくいった手応えを得る**」と話をされたことがよみがえってきた。田村視学官は、次のようにまとめられていた。



手応え感覚(ポジティブ感情)

- ①**充実感**「さすが」「気持ちいい」などの言葉にならない満たされた感覚
(②～④を支える)
- ②**達成感**「なるほど」「わかった」「できた」「できそうだ」などを支える感覚
- ③**自己有能感**「少しは成長したかな」「前よりもうまくいったぞ」などの自己の成長を実感する感覚
- ④**一体感**「一緒によかった」「みんながいたから」「みんなでやると楽しい」などの協働的に学ぶ価値を実感する感覚

このお話をお聞きした時に、まるで A 児の 1 学期を表しているかのように思えた。「みんなの役に立ててうれしい」という始業式の**充実感**。漢字テストや算数、宿題が自分の力でできるようになってきた**達成感**。友達にリコーダーを教えてもらうことで「練習すれば、自分にもできた」と感じる**自己有能感**。「みんなが教えてくれたから」「みんなのおかげで」という友達との間に感じた**一体感**。それら全てがまさに、A 児の 1 学期の歩みそのものであった。

そのような「手応え感覚」を感じさせ続けたことが、A 児の変容につながったと考えられる。

人とのかかわりについて言えば、研究仮説の 2 段階まではクリアしたものの、3 段階の学年の子ども達とのかかわりの場を仕組んでいかなければならないと感じた。また異学年の先生方、管理職の先生方に対する苦手意識を払拭していかなければ、A 児が本当に変わったことにはならないと思った。

③2学期につなげたこと

1 学期の考察をもとに、2 学期に力を入れていこうと考えたのが、次の点である。

- ア. 研究方法①②③を1学期以上に意識してかかわる
- イ. A 児が引き続き「手応え感覚」を感じることができるよう、声掛けと場の保証をする
- ウ. かかわる方の層を広げるために、学年での活動の場を仕組む。また、「お手伝い」と称して、意図的に職員室等に向かわせる回数を増やす
- エ. 自分 1 人でできることを増やすために、事前に A 児にどこまで手伝いが必要かの判断をさせ、そこまでしか手を貸さない

(2)2学期の A 児の変容

①2学期の様子

2 学期に A 児が新たにチャレンジしたことは、実にたくさんあった。そのいくつかを挙げてみる。

- 始業式の学年代表の言葉を務めた

- 学級副委員長に立候補した
- 運動会の表現「西小ソーラン」の実行委員とグループリーダーに立候補しグループ練習を引っ張った
- 他の学級の子のソーランに励ましをし、
その子の合格を自分のことのように喜んだ。
- 人権標語を全校で発表するはずだった子が
お休みした際、急遽ピンチヒッターを引き受け、
見事に大役を務めた
- 11月からは、毎日の宿題を自分でやってくるようになった
- 持久走大会に向けての練習で常に記録を更新しようと、全力で走った
- 日記(※日記4)に自分の思いや、友達への感謝の気持ちに加え、友達や教師を気遣う表現も出てきた



※日記4: 11月26日(土)

ぼくは3年生のときは何もしないで何もどりよくしようとしなかったです。でも、ぼくは4年2組になってからみんなのささえがあつてここまでこれました。でもこれは石井先生のおかげでもあります。それはチャレンジとはなにかをみんなにずっと言ってきたからです。先生とクラスのおかげで今のぼくはあると思います。もしチャレンジをしていなかったら、今のぼくじゃなくてゆめまでかなっていなかったはずです。みんながぼくをささえなくて、Mさんがうそをついたときも、みんなMさんをせめなくてみんなやさしいなあと、その時は先生もあきらめようかと思ったそうです。でも先生もときにはささえられているときもあることがわかりました。もうすこしで5年生になってクラスがべつべつになるかもしれないとかがえるとずっと4年2組がいいです。



「Aさんすごい」

今日、Aさんが日記を2ページも書いていました。その内容は、4年2組の人がささえられてうれしいと書いていました。みんなそのことについて感想を言いました。ぼくは、Aさんは「支えてもらっている」と言っているけど、Aさんもみんなをささえられているので、すごいと思いました。11/28(Y)

- 漢字小テストがNo.100まで友達に手伝ってもらってやっとそろった。その喜びを養護教諭に伝えに行った。その直後、友達の勧めで教頭先生のところにも見せに行った
- 冬休み中に学校に来た際、管理職の先生方に自分から新年のあいさつをし、手を振って帰って行った
- 冬休みの宿題を全てではないが、自分でやってきた

②2学期の考察

2学期のA児も1学期以上の成長を見せた。その中でも、大きな成長は、他学年の先生方や管理職の先生方とのかかわりに見られた。A児が本当の意味で変わろうとしている証拠であると感じた。

また、苦手なことや苦しいことから逃げない姿も多く見られた。そのA児の姿を見た子ども達が、「Aさんが頑張っているから」「Aさんだっみんなを支えてくれているから」と自分達も頑張ろうとする姿がたくさんあった。このことは、A児の成長ぶりを目の当たりにした子ども達が、「人間いつでも変わることができる」ことを実感したからだと思う。A児1人を支える学級づくりが、40人の成長へとつながったことを確認できた。

どちらも、6(1)③「2学期につなげたこと」を意識して続けてきた成果であると考え。

③3学期につなげたいこと

3学期のA児の目標は、「宿題を全部やり通せるように真剣に何にでも努力できる自分になりたい」というものであった。冬休みの宿題を全部やり遂げることができなかつたことを彼なりに悔いていた。これまでの彼を見ていて、3学期に彼に付けるべき力は、

「最後まであきらめずに自分でやり通す力」

であると私も思っている。A児自身の願いでもあるその力を確実に身に付けさせ、A児を5年生へと送り出したいと思う。

7 成果と課題

(1)成果として言えそうなこと

A児は、確実に変わった。そして、「もう昔の自分には戻りたくない」と言っている。彼をそんな風に変容させたのは、まぎれもなく友達の支えであった。**1人を支える学級集団をつくっていくこと。1人の子にしっかりと寄り添うことは、残りの40人に寄り添うことにつながるのだ。**それをA児と子ども達が教えてくれた。

以下のことが今回の実践を通して今の時点で私なりに確認できたことである。

- ①「発達障害」はその子の全てではなく、個性である。
その言葉に安心することなく、その子を1人の人間としてどこまで信じ、愛してかかわることができるかが最も重要なことである。
- ②一人一人の子に、どうなってほしいのか、どんな力をつけたいのか明確な願いをもつ。
- ③その子の小さな変化を見逃さず、**信じ—褒め—つなぐ**を繰り返す。
子ども達は1人で成長するよりも周りの友達とかかわり共に成長していく方が遥かに伸びていく。
- ④常に1歩前進。課題からその子の成長に向けた次なる目標を立て、成長をつないでいく。

(2)課題

A 児が変容したと言っても、今後集団が変わり、彼が成長していく中で、同じようなペースで成長を遂げていけるかどうかはわからない。そのため、①彼自身を今より強くすることと共に、②保護者との連携も今後一層必要となってくるであろうと考える。幸い、A 児の保護者の方には、信頼を頂いている。今後も保護者との連携を密に取りながら、A 児の成長を学校と家庭で同じ方向を向いて支えていくことが何より大切なことだと感じている。

Ⅲ おわりに

実は、A 児との本当の出会いは、3年前に遡る。A 児が1年生として入学して来た時、「気になる子」であった A 児のペアの6年生を決めた。その子の担任が私であったのだ。当時の A 児は、落ち着きはないものの、お兄ちゃんに手を引かれ、愛らしく見えた。気が付くと、どこかにいなくなってしまう A 児を、多くの6年生が優しく見つめ、可愛がっていた。純粋な6年生の子ども達は、そんな A 児の光の部分だけを見て、かかわっていたのだと思う。

「人との出会いは、人にはつくれない」と言う。3年の時を経て A 児と3度目の出会いを頂いたことを私は偶然ではないと感じている。その出会いへの感謝と、これまで A 児にかかわってくださった全ての方への感謝の気持ちをこの実践記録に込めさせて頂いた。

